



# 絵美先生と 秘密の内覧会

ルンルン

# 絵美先生と 秘密の内覧会

著者：ルンルン

絵美がここに立っているのは、ひとえに血縁のしがらみによるものだった。

叔父が経営する小さな不動産会社が、決算期で人手が足りないと泣きついてきたのだ。

「宅建を持ってる絵美ちゃんだけが頼りだ」とおだてられ、せっかくの休日を返上して引き受ける羽目になった。

現場は、都心から電車とバスを乗り継いだ先にある、郊外の真新しい造成地だ。

切り拓かれたばかりの赤土と、黒々としたアスファルトのコントラストが目には痛い、似たような家が建ち並ぶ一角。

身体のラインを拾うタイトなスーツに身を包み、絵美は「宅建資格を持つ説明役」として、リビングの窓際に立っていた。

新築特有の接着剤と木の混じった匂い。

まだ誰の生活臭もしない、白々しいほどに真っ白な空間が、今の絵美の気だるさを際立たせていた。

(……私、こんなところで何やってるんだろ。まるでこの真っ白な箱に閉じ込められた、売れ残りの人形みたいじゃない)

一階のリビングで手持ち無沙汰になった絵美は、客の動線を確認するという名目で二階へと上がった。

突き当たりにあるのは、八畳ほどの主寝室だ。

南向きの大きな窓から陽光が降り注ぎ、部屋の中は暖房がいらぬほどに暖かい。

部屋の中央には、モデルルーム用の演出（ステージング）として、真新しいダブルベッドが鎮座していた。

シワひとつない真っ白なシーツ。ふかふかの枕。いかにも「幸せな家庭」を具現化したようなその場所に、絵美は吸い寄せられるように近づき、ふと腰を下ろした。

(……はあ、疲れた。座り心地だけは最高ね)

スプリングが沈み込む感触と同時に、タイトスカートの生地が腰回りでピンと張り詰め、太ももを強く締め付けた。

その窮屈な圧迫感が、予期せぬスイッチを入れる。

ストッキングに包まれた脚を少し組み替えた瞬間、布擦れの音と共に、下腹部の奥で甘い疼きが跳ねた。

(え……?)

静寂。あまりにも静かだ。

誰の目もない、真っ白で清潔な空間。

窓から差し込む暖かな日差しが、スーツ越しの肌をじわりと火照らせていく。

不意に、強烈な衝動が突き上げてきた。

このままベッドに倒れ込み、きつく締め上げられたスカートの中に指を滑り込ませてしまいたい。

この完璧に整えられた他人の寝室を、自分の熱と匂いで汚してしまいたいという、背徳的な欲求。

絵美の呼吸が少し荒くなる。無意識のうちに、太ももを擦り合わせ、快感を追いかけてそうになった。

(……だめ。何考えてるの、私)

寸でのところで、理性が警報を鳴らした。

いつ内見の客がチャイムを鳴らすかもわからない。

ここは職場だ。

しかも親戚の頼みで立っている、神聖な「商品」の上だ。

「……ふう」

絵美は短く息を吐き出すと、熱を帯び始めた身体を無理やりベッドから引き剥がした。

乱れかけたスカートの裾を神経質な手つきで直し、赤らんだ顔を手のひらで扇ぐ。まだ身体の芯に残る痺れを無視して、彼女は逃げるようにその部屋を後にした。

一階のリビングに戻っても、静寂は破られることがない。

そもそも、この家に絵美以外の人間は最初からいなかった。

「悪いけど、ゴルフのコンペと被っちゃってさ。鍵は開けとくから、絵美ちゃん頼んだよ」

そんなふざけた電話一本で、叔父は内覧会のすべてを絵美に丸投げしたのだ。

この広い新築住宅に、管理者は絵美ひとりきり。

監視の目はどこにもない。

(……退屈すぎて、頭がおかしくなりそう)

キッチンカウンターに頬杖をつき、絵美はほうっと熱い息を吐いた。

先ほど二階の主寝室で覚えかけた身体の疼きが、波が引くどころか、この孤独な「密室」のせいで余計に質量を増している気がする。

スマホを取り出し、連絡先をスクロールする指先が『たくみ』という名前の上で止った。

彼は、絵美が講師を務める資格予備校の講座を受け持っている社会人受講生だ。

恋人というほど重くなく、ただの生徒と呼ぶにはあまりに深く繋がりがすぎた、共犯者のような関係。

(あのひと、今日は用事がないと言っていた)

絵美は口元に妖艶な笑みを浮かべると、迷わずトーク画面を開いた。

誰もいないリビング。

真っ白な壁。

この殺風景な空間に、彼の熱を持ち込めばどうなるか。  
想像するだけで、タイトスカートの中の太ももがむず痒くなる。

『わたし、今、〇〇町に分譲地でアルバイト中なんだけど』  
広い新築一戸建てに、わたししかいないの』

送信ボタンを押すと、すぐに既読がついた。  
絵美は少し間を置いて、決定的な誘い文句を打ち込む。

『退屈で死んじゃいそう。……ねえ、課外授業しに来ない？』

「課外授業」という言葉に、彼との何度かの情事がフラッシュバックする。  
まだ生活感のない真っ白なモデルルームで、先生と生徒が二人きり。  
絵美はスマホを胸に押し当て、誰も来るはずのない玄関を見つめた。  
もし彼が来たら、今回はきっと、今までで一番激しいものになる。  
そんな確信めいた予感が、絵美の身体を内側からじっとりと濡らしていった。

「ひやかしていいから、来ない？」

その誘いに乗り、たくみは郊外の住宅街へと車を走らせた。  
カーナビが指し示した先は、まだ開発が始まったばかりの真新しい分譲地。  
その一角に、周囲の風景から浮き上がるようにして建つ白亜の新築戸建て住宅が  
あった。

(あんなに堂々と誘っておいて、同僚や上司がいたらどうするつもりだ……)

そんな懸念を抱きながら、たくみは分譲地の入り口に車を停めた。  
だが、家の方へ歩み寄っても、案内用の幟（のぼり）がはためいているだけで、  
人影はない。

それどころか、営業用の社用車すら見当たらなかった。

不審に思いながら玄関のインターホンを押そうとした瞬間、音もなくドアが開いた。

「お待ちしておりました。たくみ様」

---

絵美先生と秘密の内覧会

著者・制作：ルンルン

発行：2026 年 4 月

---